

土佐の南国ルネサンス構想

11

土曜市の会場、入り口付近にあるこの門柱、ちょっと変わっています。この門を通過しようとする、道がない……前を流れる小川に落ちてしまいます。2本の門柱の東側には、大型自動車がゆっくり入る立派な通路。

はたしてこの門柱、どうしてこのような位置に立っているのか。何か意味があるのでしょうか。正月早々見付けた、なかなか不思議なものでした。



「ごめん」と土佐日記
▼このシリーズは昨年四月号から続けてきましたが、審議会の最終審申（昨年十一月十三日）を受けて、いよいよ次回で終りになります。今回は、ルネサンス構想を検討する過程での市民の意見やエピソードなどについて聞かせてください。

市民の建設的な提言やアイデアを……と始めたのが市役所一階市民ホールに設置された「アイデアポスト」です。租税「ごめん」のまちなど、ユニークな提言がありました。「現在の後免町で個人商店を営む者、これから商店を始める者について所得税を全額免除する」というもの、「化石のまち」とか、「荷車の似合うまち」などと、やゆされてきた後免町、個性のあるまちづくりとして、舟入川の親水空間やごめんのネーミングが検討されているもの、あっと驚くインパクトが欲しい。超法規的だが、かつて野



中兼山のもくろんだ効果の再現として実現したかったテーマ。基本構想にズバリ載せられなかった……
▼政治的決断で行動計画に入れてほしいですね。免除でなくてもなんとか租税「ごめん」のまちを再現してほしい。やり方としては、いろんな面白いアイデアが考えられますから、「ごめん」をキーワードにした個性と魅力のあるまちの再生」として基本計画の柱に入れてあります。もう一つは、やはり土佐日

記の紀貫之です。「ひらがな文化・日記文学に市民権を与える」という提言ですね。
▼「一筆啓上文学賞」が大変評判ですね。ひらがなが日本語と日本文学に与えた影響は大きいからね。
土佐日記は、日記文学の互分けでもあるんです。ひらがなを使った文書には、どこかしら親近感が持てますよね。ワープロの時代になれば、なおさら稀少価値が出てくるんじゃないですか。
基本計画の主要なプロジェクトの中には、土佐日記ひらがな文化大賞として入れてありますので、現代風にアレンジして、「新二佐（絵）日記」として子供から大人までが参加できる「絵日記、絵手紙」のような大衆的なものにして公募すれば面白いですね。

「香り」とゆうすげ

▼「香りのまち」「ゆうすげの恋エアライン」などのアイデアもあったそうで



小笠原文美さん（国分）より寄せられた写真、新春の風物詩、1月6日に行われた国分寺の若菜がゆ。春の七草を採ってきて、葉の繊維をほぐすため棒でたたき（写真）、おかゆの中に入れます。

いま部落は、そして……

子どもと共に学ぼう

同和シリーズ

一九九一年度「同和問題に関する南国市民の意識調査」によると、

市民・県民の意識は？⑬

同和問題について最初に知らされた時期は「小・中学校時代」が最も多いこと、「父母や家族」など身近な人から日常会話を通じて知られていること、その内容は「願った知識や偏見によるもの」が大部分になっていることが明らかにされ

ています。従って、これからの啓発では、次代を担う子どもたちを育てる親の意識を変えることが大きな課題と考えられます。そこで、昨年夏から、市内の三つの小・中学校のPTAで保護者を対象に同和意識を高めるための講座を行っています。受講後、保護者は次のような感想を述べています。
『やはり同和問題は自分自身の問題、自分がどう生きて行くのかが大切なんだなあと

しみじみ思いました。これからどう行動するか、ときに間違ふこともあるかも知れませんが、子どもに負けないようしっかりと育自して行く必要性を感じています。』
『自分ではあたりまえに思っていたことが、とんでもない大きな差別のかたまりだった」と気づかされた。親の価値観がわが子に知らず知らず伝わっていると考えると、まず、自分をみがかねば、し思った。』
『同和問題の学習を、親も子どもたちに負けないようにしていかねばならないと思いま

た。親が同和問題に全く無関心であったり拒否的であったりすると、学習している子どもの目にはどのような印象でしようか。改めて差別の話を知りたがる機会はなくとも、同じことを学習しているか、という意識が親子の心を結びつけ、折にふれ、それはまがっている」と共に思えるようになる。差別をね返す力も大きくなるのではないかと感じています。』
推進講座を主催した保護者は、家庭や地域における日常生活の中で、差別的な言動をそれとは気づかないままに行

っていることに気づき、親自身が正しい生き方を身につけ、子どもと共に学ぼうとする意識が生まれてきています。
PTAは、他の諸団体に比べて組織も大きく、社会のすべてのかかわりを持っていきます。それだけに、同和問題に対する理解や認識の深まりが、子どもたちを中心に周囲の人びとに与える影響は大きいと言えます。
これからは、PTA活動の中に、同和問題の計画的、継続的な学習ができる組織をつくり、推進講座のような研修の機会を設け、積極的に学習してほしいものです。

ゆうすげ はユリ科でキスゲこもいわれ、夕暮に咲いて翌朝しほむ黄色い花、高知空港周辺をゆうすげの花で包み、観光客が真っ黄なゆうすげの花に迎えられ、翌朝は花に送られて南国土佐を去る。ゆうすげの恋エアライン」という発想ですね。残念ながら二つとも認知されなくて総合計画には載りませんでした。いろいろなアイデアもいざ、行政計画」となると難

しい面もあるでしょうね。日本一、お年寄りに幸福な福祉のまちづくりも提案されました。高齢者県高知を逆手に取って日本一にしようという発想なんです。説得力はありますね。若者のまちとお年寄りのまちが競合して、「どちらかといえば若者」ということになりました。働く場の確保、快適な居住環境づくりで若者の県外流出を阻止することが優先されたというわけなんです。